

なみなみと

和上京鈴

「なみなみと」登場人物表

在原良仁 (28)	営業マン
長井マサコ (75)	未亡人
久野さくら (20)	レンタル彼女
綺羅綺羅ヒカル (26)	ホスト
森川万里奈 (28)	良仁の元カノ

在原良仁（28）と長井マサコ（75）が並んで歩いている。

マサコ 「美味しかったわねえ、ケーキ」

良仁 「ええ」

マサコ 「あれ何て言うんだったかしら、えっと……バ……なんとか……」

良仁 「バスクチャーズケーキです」

マサコ 「そうそう、それ。でも、本当に良かったのかしら、ご馳走してもらって」

良仁 「勿論。僕が誘ったんですから」

良仁とマサコ、出入り口前で立ち止まる。

マサコ 「それじゃ、私こっちだから。今日は楽しかったわ、ありがとう」

良仁 「こちらこそ、付き合っていたらいい」

マサコ 「この年になってデートだなんて……（笑って）死んだ夫を思い出したわ」

良仁 「……三年前に亡くなったんでしたっけ」

マサコ 「そう。お見合いだったんだけどね、どんどん好きになっていって。よく一緒に海辺を歩いたわ。また行きたいけど、もう気軽に遠くに行ける体じゃないから」

良仁、困ったように苦笑いする。

マサコ、手を振って。

マサコ 「それじゃあ、頑張ってるね。また会いましょう」

良仁 「はい、ありがとうございました」

マサコ、階段を下りていく。

良仁、マサコの背を見つめる。

良仁 (N) 「俺は、恋心というものを知らない」

3. マンション・玄関・昼・中

良仁、靴箱の上に鍵を置いて、部屋に上がる。リビングへ向かう。

4. 同・リビング・昼・中

良仁、ソファの横に鞆を置いて、ソファに腰を下ろす。

良仁 (N) 「小さい頃から、誰かに憧れを抱いたことはあっても、それを恋だと思えることがなかった。中学、高校、大学という青春時代も、部活と勉強と遊びのサイクルで回っていた」

良仁、尻ポケットからスマホを取り出す。SNSの通知がきている。開くと、グループトーク画面で友人から「男の子が生まれました!」という赤ん坊の写真付きのメッセージ。

良仁 「別にここに上げなくても……」

良仁、「おめでとう! 元気に生まれて良かった!」と送信して画面を閉じ、ソファの上に裏返して置く。

良仁 (N) 「だから俺は、自分がどういう相手に恋愛感情を抱くのか知りたくなった」

5.

公園・昼(回想)

スーツ姿の良仁、ベンチでコンビニのおにぎりを食べている。

そこにやってきて笑いかけるマサコ。

良仁(N) 「最初は、平日の昼休みにいつも会うマサコさんをお願いしてみた。でも、違うようだった」

マサコ、良仁の隣に座る。喋りながら不意に空を見上げる良仁。

良仁(N) 「きつといるはずだ。俺が好きになれる、誰かが」

T…タイトル「なみなみと」

6.

駅前・昼

駅前の待ち合わせスポットでスマホをいじっている良仁。

お洒落した久野さくら(20)がやってくる。

さくら 「お待たせー。良仁さん、で合ってますよね？」

良仁、顔を上げて彼女を見る。

良仁 「あ、はい、そうです」

さくら、笑顔。

さくら 「良かったあ。写真よりかっこよかったから一瞬わかんなかった」

さくら、良仁に腕を絡めて歩き出す。

さくら 「さ、行きましょー！」

人通りの多い道を歩いていく二人。

良仁 (N)

「彼女は久野さくら。レンタル彼女という、本当の彼女になつたつもりでデートをしてくれるサービスの女の子だ。これなら俺の作戦も罪悪感なしに決行できる」

7.

喫茶店前・昼・外

歩いている二人。さくら、立ち止まる。

さくら

「あっ、ここです！ 来たかったお店！」

さくらが指差した先に、可愛らしい雰囲気のカフェ店。

良仁

「じゃあ、入りましょうか」

さくら

「んもう、堅苦しくしないで。私、良仁さんの彼女なんだから」

ウイंकして店のドアを開けるさくら。

8.

喫茶店・昼・中

テーブルで向かい合って食事している良仁とさくら。良仁はエッグベネディクト、さくらはクリームが山盛りのパンケーキ。

さくら

「うーん、美味しい！ ねえねえ、一口食べる？」

良仁

「あ……えっと」

良仁 (M)

「そうそう、これこそまさにデートだ！」

良仁

「うん、ちょうだい」

さくら、パンケーキを切ってクリームをたっぷりつけ、良仁の口元へ。

さくら

「はい、あーん」

良仁、食べる。甘さに顔を若干歪めながらも頷く。

良仁 「うん……美味しいね」

さくら 「でしょー！ にっこりマークの具現化って感じ！」

良仁 「にっこ……え？」

さくら 「良仁さんと食べるからより美味しいのかな。うちの彼氏最高ー！」

良仁、食べ進めていくさくらを見る。

良仁 (M) 「なるほど、恋をするとそういうプラス効果があるのか。いや、単なる営業トークという可能性もある。美味しそうにしているのは間違いないが……読めない、さすがはプロだ……」

さくら、良仁の視線に気づいて笑いかける。笑い返す良仁。

良仁 (M) 「確かに楽しくはある。でもこれはシチュエーションが新鮮なだけで、この子に対してドキドキするとかそういうことでは……なかった」

良仁、顔をしかめて口をもぐもぐさせる。

良仁 (M) 「……甘っ」

9. ホストクラブ・夜・中

テーブルでホストたちに囲まれている良仁。

綺羅綺羅ヒカル (26) がやってきて、良仁の隣に座る。

綺羅綺羅ヒカル 「どーもー、綺羅綺羅ヒカルっています。一応このナインバースリー。よろしく！」

ヒカル、テーブルに置いてあるグラスを掲げて良仁の肩に腕を回す。

綺羅綺羅ヒカル 「いやー、男性のお客さんなんて久しぶりじゃん？ テンション上がるわー。どんどん飲んでこうぜー！」

良仁、グラスを持ちながら笑う。

良仁 (M) 「これも違う」

10. マンション・寝室・夜・中

ベッドに寝転がってスマホを見ている良仁。画面には女の子のキャラクターが映っているゲーム。

キャラクター 「あたし、お兄ちゃんのこと、だーいすき！」

良仁 (M) 「これも違う」

11. 犬カフェ・昼・中

犬と触れあっている良仁。犬に懐かれている。

良仁、デレデレしながら。

良仁 (M) 「これも違う……可愛いけど！」

12. ファミレス・昼・中

一人でテーブル席に座っている良仁。頭を抱えている。テーブルの上にはハンバーグを平らげた跡。

良仁 「ああ……だめだ、わからない。ぜんっぜんわからない」

良仁、空になった皿の上を見つめる。

良仁 (N) 「意識すれば、誰かしらにときめくと思った。けどこのままじゃ俺は、ひよつとしたら誰のことも愛せないまま人生を終えるのかもしれない」

良仁、遠くの席で食事している家族客を見る。

良仁 (N) 「別に一人が嫌なわけじゃない。自由な今の生活を手放してまで結婚したいかと訊かれたら、そうだとはすぐに言えない。勿論それはそれで楽しいんだろうけど」

良仁、ため息をつく。

良仁 (N)
「ただ俺は、自分の環境を変えてまで一緒にいたいと思っ
てしまえるような気持ちをも、経験してみたいのだ。だけ
ど、やっぱり俺には……」

顔を上げたとき、店の前を通りかかった森川万里
奈 (28) と目が合う。

良仁 「あ」

万里奈、驚いて口を開ける。

13. 同 (時間経過)

良仁と万里奈が向かい合って座っている。テーブ
ルの上にはコーヒーが二つ。

良仁、コーヒーにミルクを三つ入れる。それを見
つめる万里奈。

万里奈 「相変わらず、ミルクの量多いね」

良仁 「そう？ 万里奈こそ、砂糖入れなくていいの？ 昔はプ
ラックなんて飲めなかったでしょ」

万里奈 「別れてから何年経ったと思ってるのよ。高校のとき
よ？」

良仁、笑ってコーヒーを口にする。そのとき、万
里奈の左手の薬指に指輪を見つける。

良仁 「あ……それって」

万里奈、指輪を見て。

万里奈 「ああ、これ？ うん、まあ、結婚するんだ。私の誕生日
に籍入れる予定」

良仁 「へえ、それはおめでとう！」

万里奈、照れる。

万里奈 「ありがとう……」

良仁 「どこで知り合ったの？」

万里奈 「マッチングアプリ」

良仁 「ああ、今多いよね」

万里奈 「何人かと会って、今の人と出会ったときに、まあこの人のいびきなら我慢してあげてもいいかなって思ってた」

良仁、コーヒーを吹き出しそうになる。

良仁 「いびき？」

万里奈 「一緒に生活するってそういうことでしょ」

良仁 「……確かに」

万里奈 「ねえ、良仁。今だから訊けるんだけど……付き合ってたとき、本当に私のこと、好きだった？」

良仁、カップを置くこうとする手を止める。

万里奈 「あのときは、受験に集中しようってことになって終わったけど……良仁、私のこと好きって言ってくれたことなかったし。手だっていつも私から繋いでたし」

良仁、カップを置いて俯く。

良仁 「……ごめん」

万里奈、笑う。

万里奈 「やっぱり」

良仁 「告白されて、そのままの勢いというか……悪いと思ってる」

万里奈 「いいよ、若いときのあるあるだし。わかってすっきりした」

良仁、万里奈を見つめる。

良仁 「あの……実はさ……」

14.

同(時間経過)

万里奈、テーブルに頬杖をついている。

万里奈 「なるほどねえ……恋愛感情が湧かない、か」

良仁、頷く。

万里奈 「にしても、行動力ありすぎ。お年寄りから動物までつて」

良仁 「何がきっかけになるかわからないだろ」

万里奈 「……でもさあ、恋じゃなくても、愛なら知ってるじゃないか」

良仁 「え？」

万里奈 「ご両親。数回しか会ったことないけど、凄く仲いいじゃん。愛されてるってことでしょ」

良仁、しばらく考えて。

良仁 「……そうだね」

万里奈 「良仁が求めているのは少し違うかもしれないけど、まったくかけ離れてるわけじゃないよ」

万里奈、窓の外を見て。

万里奈 「愛情っていっぱい種類があるけど、根元は同じなんじゃないかな」

良仁、つられて窓の外を見る。

外ではカップルや友人同士、家族などが仲良さそうに歩いている。

15.

海辺・昼

砂浜の上を歩いている良仁とマサコ。マサコを支えるようにして歩きながら、海を眺める良仁。

マサコ 「青いわねえ」

良仁、マサコを見る。

良仁 「ええ。綺麗ですね」

マサコ 「ありがとうね、連れてきてくれて」

良仁 「先日のお礼です。今度はデートというより、友人として散歩にと思って」

マサコ 「嬉しいわあ。私はデートでもいいんだけど」

お茶目に微笑むマサコ。

そのとき、波が二人の足元に被る。歩みを止めて足元を見る二人。

良仁 「あっ……」

マサコ 「(笑って)あとで洗わないといけないわね」

良仁、顔を上げて広い海をぼうっと見る。

良仁 「……海はいいですね」

マサコ 「海、好きなの？」

良仁 「それもありますけど……いつだって大きくて、変わらなくて。どっしり構えてていいなあ」

マサコ 「……変わり続けてるわ、海だって」

良仁、マサコを見る。

マサコ 「同じ波はないし、決して元には戻らない。水の中なんてぐちゃぐちゃにかき乱されてる。一見同じでも、変わらな
いものなんてないのよ」

良仁、驚く。寄ってくる波を見つめ、それが去って行くのを見届ける。

マサコ 「恋心、わかった？」

良仁、首を横に振る。

良仁 「いいえ」

マサコ

「そう。でも、それがわかったことだって発見だわ。ありのままの自分を受け入れることだって、進歩なのよ」

良仁

「……ありがとうございます、マサコさん」

良仁、海を見て優しく微笑む。

海がキラキラと光っている。

良仁

「行きましよう」

良仁、マサコと共に歩き出す。

二人の背中と海。

(終わり)